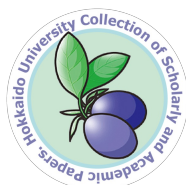




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	オホーツク文化の動物利用について：プロムイスロヴォエII遺跡（東多来加貝塚）を中心に
Author(s)	内山, 幸子
Citation	サハリンにおけるオホーツク文化の形成と変容・消滅：日ロ共同シンポジウム, 5, 124-130
Issue Date	2002-02-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73775
Type	conference paper
File Information	124-130.pdf



オホーツク文化の動物利用について —プロムイスロヴォエⅡ遺跡（東多来加貝塚）を中心に—

内山 幸子*

I. はじめに

北海道北部、東部からサハリン、千島にかけての沿岸地域に主として分布したオホーツク文化は、高度に海洋適応を遂げた文化として知られる。事実、同文化で海獣狩猟に用いられた回転式鉋頭の顕著な発達や、魚骨やウニ殻、海獣骨などが多量に出土する様相は、当時の海への依存度の高さを示している。

オホーツク文化における動物利用体系は、漁撈や海獣狩猟、ウニや貝の採集を中心として、陸獣や鳥の狩猟、イヌやイノシシ属（通称：カラフトブタ）の利用が複合して成り立っているとみられる。しかし、動物遺体に関しては、一部の事例を除いて、遺跡ごとの種名の列挙や定量分析データの提示にとどまる例が多く、動物利用の地域性や時期別変遷などについての取り組みは進んでいないのが現状である。

今回の報告では、オホーツク文化における動物利用の実証的把握にむけた足がかりとして、同文化後葉を代表するサハリン中部のプロムイスロヴォエⅡ遺跡（東多来加貝塚）を取り上げ、フェドルチュク氏（В.Д.Федорчук）によって行われた発掘調査による出土資料の一部と、すでに公表されている概要報告の内容に基づいて、当時の動物利用について検討を試みることにした。

II. プロムイスロヴォエⅡ遺跡について

遺跡は、サハリン中部の中心都市であるポロナISK市街の東を流れるポロナイ川、タランカ川、プロムイスロフカ川を経て、さらに東に位置する（地図矢印部分）。遺跡は、ネフスコエ湖とテルペニア湾に挟まれた細長い砂洲上にあり、ネフスコエ湖に沿って広がる。ネフスコエ湖に面しているために、雪解け期の増水による遺跡の破壊が年々進んでおり、遺物の一部は露出した状態にある。これまでの調査で出土した土器の大半は、「東多来加式」（伊東 1942：26 頁）というオホーツク文化後葉に属する土器で占められており、動物遺体に関しても当該期に属するものと解釈し得る。

プロムイスロヴォエⅡ遺跡は、多量の動物遺体が出土することで古くから注目されていた。しかし、動物遺体については、種名を列挙する定性分析やイヌやイノシシ属の形態に関する研究が主体的になされており（直良 1937、1938、1939、1957、1973、岡・馬場 1938、甲野 1938、斉藤 1938、高橋 1940a、1940b、馬場 1940、奥山 1941 など）、定量分析は現在筆者が進めている例と魚類と鳥類に関する報告例（Сафронов et al. 2001、Пантелеев 1997）を除いてほとんど行われていない状況にある。

III. 定量分析結果と種別の検討

分析対象とした資料は、1994、1995 年にフェドルチュク氏によって行われた発掘調査による出土資料のうち、貝類と魚類を除いた動物遺体の一部である。資料は極めて多量であることから全量の分析は困難であった。なお、分析作業は 1998 年から筆者がサハリン州立博物館で行い、2000 年には諸留佐織氏（札幌大学）とともに作業を進めた。

同定した動物遺体は、表に示した通り、イヌとアザラシ科、イノシシ属の 3 種類に大きく偏る結果

となった。それ以外の獣類はいずれも少量である。以下に主要な出土動物についての分析結果を提示し、これまでに示された概要報告の内容とも合わせて、種別に検討を試みることにする。なお、出土量表は割愛した。

1. イヌ

イヌは分析資料中で最も数多く確認されており、右下顎骨に基づく最小個体数は 67 個体にのぼる。イヌはこれまでに行われたいずれの調査でも多く、当時イヌ利用が盛んに行われたことは容易に想像される。

出土状況については、1995 年に行われた調査でイヌの埋葬およびその周辺でイヌ頭部の集中的な出土が確認されている他は報告例がなく、散乱状態を示していたものと思われる。このような出土状況は、イヌに対して解体を伴う行為、すなわち肉の採取が行われた結果であると推測される。

死亡年齢の推定は、森（1930）による現生犬の歯牙発生の研究に基づいて行った。その結果、右下顎骨において、乳歯のみが萌出している生後 4 ヶ月未満の個体（幼獣）は 24 個体（約 35.8%）、生後 4 ヶ月以上から永久歯の歯根の形成が完了する直前の生後 8 ヶ月未満の個体（若獣）は 9 個体（約 13.4%）、生後 8 ヶ月以上の個体（成獣）は 34 個体（約 50.7%）となった。成獣の中で、永久歯に摩耗が認められる資料はほとんどなく、関節の縫合線が明瞭な資料がみられることから、成獣の中でも比較的若い個体を中心であったことがうかがえる。

また、歯列不正や、歯槽骨の吸収などを伴う歯周疾患が多くの資料で確認された。

人為的に付けられたと思われる傷が、少量ではあるが認められた。なかでも下顎骨頬側の傷は、毛皮剥ぎの際に付いた可能性が高いとみられる。

イヌの骨を用いた製品はほとんどみられない。

以上の分析結果から、イヌは主として肉や毛皮の供給源としての役割を担っていたと考えられる。しかし、イヌの埋葬と頭部集中の例は、イヌに非実用的価値が存在したことを示すとともに、野生獣と飼養動物とを厳然と区別した同文化の動物観に大きな変化が行った可能性を示唆する（内山 2000）。

2. アザラシ科

アザラシ科はイヌに次いで多く確認されており、頭蓋骨の乳様突起に基づく最小個体数は 42 個体にのぼる。出土状況に関する報告例はなく、散乱していたものと思われる。

今回の分析では、種レベルの同定は行わなかったが、下顎骨などの形態的特徴において明らかな多様性が見られた。当遺跡周辺では、ゴマフアザラシ、クラカケアザラシ、フイリアザラシ、アゴヒゲアザラシが分布していることから、これらのうちの複数種類が狩猟対象とされたのではなかろうか。なお、アザラシ猟に際しては、当遺跡で豊富に出土している銚頭が用いられたとみられる。

3. イノシシ属

イノシシ属はイヌ、アザラシ科に次いで多く確認されており、右上顎骨に基づく最小個体数は 34 個体にのぼる。出土状況については、これまで報告された例がなく、散乱していたものと思われる。

死亡年齢の推定は、林他（1977）による現生ニホンイノシシの歯の萌出・交換の研究に基づいて行った。その結果、右上顎骨において、第 1 後臼歯の萌出が認められた個体（幼獣）は 23 個体（約 67.6%）、第 2 後臼歯の萌出が認められた個体（若獣）は 6 個体（約 17.6%）、第 3 後臼歯の萌出が認められた個体（成獣）は 3 個体（約 8.8%）、若獣もしくは成獣は 2 個体（約 5.9%）となった。幼獣と若獣を

合わせると 85%以上という高い割合を占めることから、かつて直良（1938）が指摘したように、イノシシ属が若い段階で利用される傾向にあったことは明らかである。なお、幼獣が多くを占めたことから、サイズや形態、性別についての検討は行わなかった。

以上の分析結果から、イノシシ属は肉の採取を目的として利用されたとみられる。なお、皮の利用に関しては、今回の資料から確認することはできなかった。

つづいて、イノシシ属と人との関わりについて、家畜化の証拠とされる以下の事項に基づいて検討を行う。

- (a) 自然分布域外の遺跡から出土する。 → (可能性が高い) ○
- (b) 野性の個体に比べてサイズが変化する。 → (未検討) ?
- (c) 野性の個体に比べて形態に変化が認められる。 → (未検討) ?
- (d) 連続堆積する層の中で動物相に著しい変化が生じ、新しい層で現在の家畜種の割合が高くなる。
→ (層ごとの動物遺体の構成比は明らかではないが、イノシシ属の占める割合は高い) △
- (e) 狩猟された野生獣によって示されるものとは明らかに異なる性比を示す。 → (未検討) ?
- (f) 狩猟された野生獣によって示されるものとは明らかに異なる年齢構成比を示す。 → (示す) ○
- (g) 飼育に関連した道具類や柵、墓などの遺構が認められる。 → (認められない) ×

以上のように、現段階では未検討の項目も多いが、上記の結果は、イノシシ属が狩猟されたものではなく、人によって保有されていたことを示唆する。この保有形態が、生殖管理を含めた飼育の段階に達するものであったかという問題に関しては、サイズや形態、性別の他、DNA など様々な項目についての検討を要するため、現段階では明らかにし得ないが、飼養されていたことは認めてよいであろう。

4. トナカイ

トナカイは、角を素材とした製品（Федорчук1995）が多数認められる一方で、その他の部位骨の出土量が少ないことから、道具の素材としての角の利用が中心であったとみられる。角は、その大きさから雄の成獣のものが主体的に用いられたとみられるが、これが落角であるか否かについては、角座部の観察を通して検討を行う必要がある。しかし、分析資料中に当部位が含まれていなかったことから、これ以上の検討は困難であった。

つづいて、トナカイが「蓄化せられてゐた」（直良 1938 : 22 頁）可能性について検討する。コケやイネ科植物、木の葉を主食とするトナカイは、湿地帯や森林地帯に生息し、大規模な季節移動を行う。このようなトナカイの性質は、移動に不向きなイノシシ属の飼養とは相容れないことが予想されるため、この遺跡の荷い手によって、それらがともに飼養された可能性は低いのではなかろうか。以上の点から、出土したトナカイ遺体は狩猟もしくは落角の採集によって得られた可能性が高いと考えられる。

5. その他

ヒグマの出土量は少なく、積極的な利用の痕跡を認めることはできなかった。また、アシカ科の出土量も僅かであったが、これらは形態的特徴からトドもしくはニホンアシカとみられ、オットセイは含まれていなかった。クジラ類の出土量も僅かで、骨破片や製品も少ない。この他にキツネ、リス科の骨が見られるが、いずれも少量である。

IV. プロムイスロヴォエⅡ遺跡における動物利用の特徴

プロムイスロヴォエⅡ遺跡では、イヌ、アザラシ科、イノシシ属と、貝層の主体を占めるカキの4種類に利用が集中する傾向が見て取れる。なお、今回の分析結果は、これまで概要報告された内容と矛盾する点はほとんどみられないため、遺跡全体における動物遺体の傾向を反映したものといえる。つづいて、この章では、プロムイスロヴォエⅡ遺跡における動物利用の特徴を挙げ、それがオホーツク文化の中でどのような意味を持つかという点について、検討を進めることとする。

1. 飼養動物の利用の卓越

動物利用の中で最も目を引くのは、飼養されたイヌ、イノシシ属利用の卓越であり、これに関してはすでに、オホーツク文化の中では特異な経済基盤であるとの認識が示されている(直良 1938、1941、Ohya1975、大井 1981)。しかし、サハリン南部の遺跡で、江ノ浦 A 式土器や南貝塚式土器とともに、イノシシ属の遺体が多量に採集されていることから、飼養動物を盛んに利用する様相は、地域的・時間的により広い範囲に及ぶ可能性が高いとみられる。ただし、これらサハリン南部の遺跡とプロムイスロヴォエⅡ遺跡とは、(1)イヌの占める割合と、(2)イノシシ属の年齢構成において、明らかな差異がみられるため、その内容は決して一様ではないことがうかがえる。そのため、今後は、飼養動物の利用の様相について、より詳細に検討を加える必要がある。

2. 内水面での生業活動の盛行

動物利用におけるもう1つの大きな特徴は、湖や川といった内水面での生業活動が盛行した点にある。これには、動物遺体の中で主体を占めるカキや、量は多くはないが、アムールカワカマスやヌマガレイ、ウグイ類が主として関連するものとみられる。ネフスコエ湖岸に点在するオホーツク文化期の遺跡の中には、カキを主体とする貝層を伴う遺跡が多くみられるため、ネフスコエ湖を中心とした内水面への高い志向は、この地域における特徴とみなすことができよう。

オホーツク文化と内水面との関わりに着目した例としては、1977年に行われた同文化に関するシンポジウムの際に、ルスラン・ワシリエフスキー氏(P.C.Васильевский)が、鈴谷貝塚と河川との関係について触れ、それが同文化における「マリタイム・アダプテーション」(大井編 1982: 97 頁)のバリエーションの中に含まれるものだと主張した例や、アレクサンダー・ワシレフスキー氏(A.A.Василевский)による論考(ワシレフスキー1999)を除けば、僅かである。

一方、外海との関わりが重視される傾向は強く、生業活動の面でも、北海道での調査・研究成果から、ニシンやホッケなどの回遊魚を対象とした集中的かつ大規模な漁撈活動(天野 1977、西本 1978、1984)に高い関心が寄せられた。このような漁撈活動は、道北部を中心とした地域性と捉えられる。

オホーツク文化では、周囲の自然環境に応じて、外海や湖、河川などを舞台とした様々な形態の水域(海洋および内水面)への適応が計られたことが明らかであり、ネフスコエ湖岸で内水面での生業活動が盛行したことも、この一形態と捉えることができよう。なお、ネフスコエ湖でのカキ採集は湖面が結氷する冬期を除いた時期に行われたとみられるため、今後、動物利用については季節性の問題とも合わせて検討を進める必要がある。

3. 海獣狩猟の価値

アザラシ猟を中心とした海獣狩猟は、カキの採集や飼養動物の利用に比べて、生業活動に占める割合は低い。しかし、海獣狩猟に用いられたとみられる銛頭は質・量ともに際立っており、海獣を模し

た意匠遺物も多い。さらに、海獣、特にアザラシ科の肉や毛皮、脂肪は民族例でも欠くことのできないものとされていることから、当時の海獣狩猟が、実用面・精神面の両面で高い位置を占めた可能性もある。そして、当遺跡のように海洋型の経済基盤に立たない遺跡であっても、海獣狩猟に高い価値がうかがえることは、オホーツク文化を理解する上で興味深い点である。

V. おわりに

日本において、動物利用をはじめとしたオホーツク文化研究は、分布域の南域にあたる北海道での調査・研究成果に依拠する部分が多く、同文化の主要部分を包蔵するロシア側の成果については、十分活用しているとは言い難い状況にある。

今回の報告では、サハリン中部のプロムィスロヴォエⅡ遺跡から出土した動物遺体を分析対象とし、オホーツク文化における動物利用について検討を加えた結果、(1)飼養動物の利用が、従来の認識よりも、より広い地域・時期に及ぶ可能性があること、(2)オホーツク文化では、周囲の自然環境に応じた水域（海洋および内水面）への適応が計られたために、動物利用の形態に多様性が認められること、(3)経済基盤や生業活動に占める割合に関わらず、海獣狩猟が実用面・精神面の両面で高い位置を占める可能性があることが指摘できた。

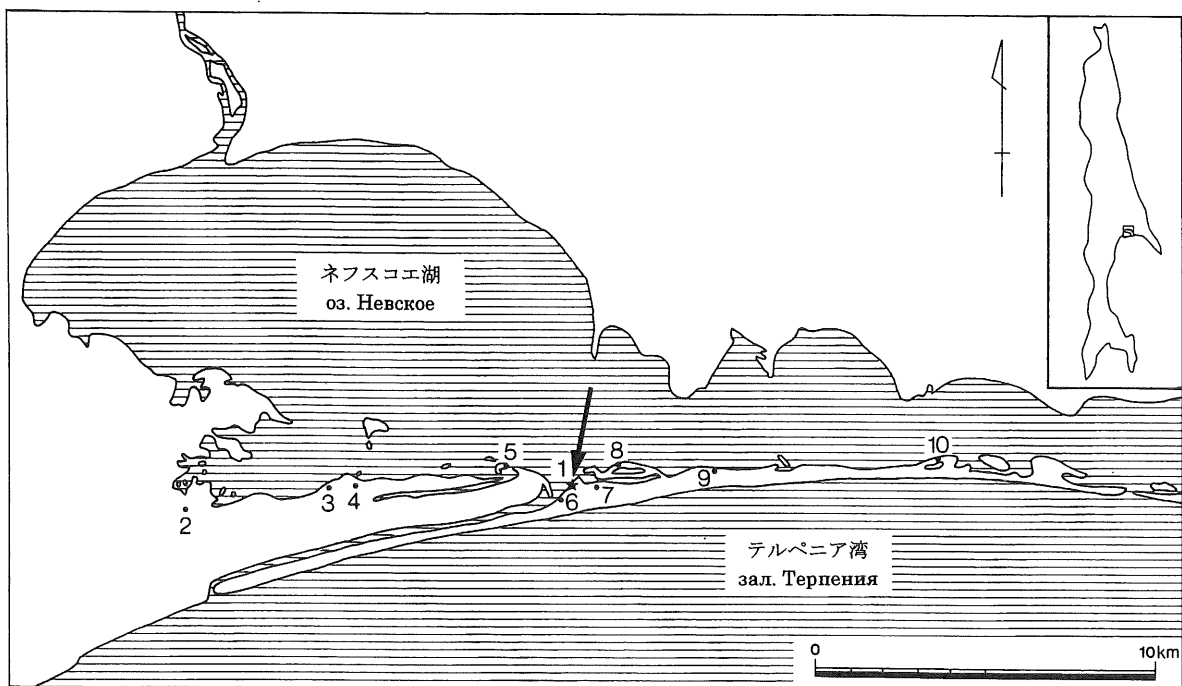
今後は、積極的にロシアや北海道での調査・研究活動に従事することを通して、オホーツク文化における動物利用について実証的な把握に努めたい。

引用文献

- 天野哲也 1977「極東民族史におけるオホーツク文化の位置（上）」『考古学研究』第23巻第4号 110～121頁
- 伊東信雄 1942「樺太先史時代土器編年試論」『喜田博士追悼記念國試論集』大東書館 1～28頁
- 内山幸子 2000「オホーツク文化における埋葬犬について」『考古学雑誌』第85巻第3号 83～97頁
- 大井晴男 1981「Ⅲ 香深井A遺跡の考古学的位置」『香深井遺跡（下）』東京大学出版会 530～566頁
- 大井晴男編 1982『シンポジウム オホーツク文化の諸問題—その起源・展開・社会・変容—』学生社
- 岡 正雄・馬場 脩 1938「北千島占守島及び樺太多来加地方における考古学的調査予報」『民族学研究』第4巻第3号 117～180頁
- 奥山鎧吉 1941「東多来加貝塚の考古学的調査」『樺太時報』第54号 59～69頁
- 甲野 勇 1938「北方調査團考古學班小報」『考古学雑誌』第28巻第12号 63～65頁
- 斉藤 弘 1938「北千島占守島堅穴並に樺太東多来加貝塚出土家犬骨に関する報告」『民族学研究』第4巻第4号 683～704頁
- 高橋多蔵 1940a「樺太犬に就いて」『樺太時報』第37号 67～80頁
- 1940b「樺太犬に就いて」『樺太時報』第39号 100～122頁
- 直良信夫 1937「日本史前時代に於ける豚の問題」『人類学雑誌』第52巻第8号 20～30頁
- 1938「北方文化圏の獣骨」『民族学研究』第4巻第4号 1～24頁
- 1939「オホーツク海沿岸の史前家犬について」『犬の研究』1月号 98～103頁
- 1941『古代の漁撈』葦牙書房
- 1957「オホーツク海沿岸地域発掘の家犬下顎骨」『古代』第25・26号 1～16頁
- 1973「日本および日本周辺地域の古代家犬骨」『古代遺跡発掘の家畜遺体』日本中央競馬会弘済会 126～246頁

- 西本豊弘 1978 「オホーツク文化の生業について」『物質文化』No.31 1～12 頁
 1984 「オホーツク文化の生業」『北海道の研究』第2巻 清文堂出版 105～126 頁
- 馬場 脩 1940 「樺太の考古学的概観」『人類学・先史学講座』第17巻 雄山閣 1～119 頁
- 林良博・西田隆雄・望月公子・瀬田季茂 1977 「日本産イノシシの歯牙による年令と性の判定」『日本獣医学雑誌』
 第39巻第2号 165～174 頁
- 森 忠男 1930 「本邦産雑種犬ニ於ケル歯牙形態及ビ其ノ二代齒列発生ノ時期ニ就テ」『日本歯科学会会誌』
 第23号 227～256 頁
- ワシレフスキー,A.A. 1999 「Adaptive strategy, man's activity and landscape in Sakhalin Island in Holocene period.」『国立歴史民俗博物館研究報告』第81集 421～425 頁
- Ohyi,H.
 1975 The Okhotsk culture, a maritime culture of the southern Okhotsk sea region. Fitchugh,W,(ed.), *Prehistoric maritime adaptation of circumpolar zone*. Mouton Publishers, pp.123-158.
- Пантелеев,А.В.
 1997 Кости птиц из поселений древнего человека на острове Сахалин. *ВЕСТНИК Сахалинского Музея*.IV, Сахалинский областной краеведческий музей, pp.281-285.
- Сафронов,С.Н., Федорчук,В.Д., Чепелев,Д.В.
 2001 Рыбы и рыбный промысел на побережье залива Терпения в эпоху охотской культуры (по материалам поселения Промысловое-2). *Ученые записки Сахалинского государственного университета*. II, pp.55-63.
- Федорчук,В.Д.
 1995 Археологические исследования Поронайского историко-этнографического музея в 1993-1994гг. *ВЕСТНИК Сахалинского Музея*.II, Сахалинский областной краеведческий музей, pp.29-53.
 1998 Керамика поселений с раковинными кучами северного побережья залива терпения. *ВЕСТНИК Сахалинского Музея*.V, Сахалинский областной краеведческий музей, pp.143-162.

＊ 筑波大学大学院 博士課程 歴史・人類学研究科



地図 プロムイスロヴォエ II 遺跡の位置

表 動物遺体の最小個体数

種名	最小個体数 (%)
イヌ	67 (44.7)
アザラシ科	42 (28.0)
イノシシ属	34 (22.7)
トナカイ	2 (1.3)
アシカ科	2 (1.3)
ヒグマ	1 (0.7)
キツネ	1 (0.7)
リス科	1 (0.7)
クジラ類	破片 (—)

